



『登別150年』への旅



『刀』から『鍬』へ、

北海道農業の新天地を 切り拓いた片倉小十郎。

1869（明治2）年、旧仙台藩の家臣で白石城主の片倉小十郎邦憲に「胆振国の内、幌別郡その方に支配仰せつけられ候事」という、明治新政府の方針が伝えられる。そのころ片倉家は、旧仙台藩の領地を取り上げられ、失地失業の状態にあった。

武士か農民かの二者択一を迫られていた小十郎は、蝦夷の新天地に起死回生の道を求める。その背景には、取り上げられた白石領のかわりに幌別郡を支配地として与えられたことや武士の姿で開拓を許されたことなどがあつた。

片倉主従が幌別郡に集団移住したときは、すでに『蝦夷地』という地名はなく、松浦武四郎によって『北海道』と名づけられていた。

当初、小十郎は、長男の景範を代理にたてて幌別の指揮を行い、自分は敗戦の余波が残る仙台城で敗戦処理の指揮に当たった。

片倉家の先行隊が幌別郡内を調査した結果、農・漁・鉦の面での産業は難しいことがわかり、多くの資金と労力を必要としていた。幌別郡には、開拓役所が開所され、幌別の入植者にはそこから米・みそ2年分が支給され、冠婚葬祭のときには金米を贈るなどの優遇措置が施行された。

1870（明治3）年、幌別に入った小十郎は、幌別郡一帯の低温地帯の痩せ地や室蘭半島の山地を見て、開拓の前途が容易ではないと判断。しかし、政府から与えられたこの土地を自らの手で開拓するという使命感に燃えていた。資金の調達に苦労しながら、食糧・道具、生活必需品などの支援態勢を整え、開拓役所を主軸に、小十郎は開墾へと取り組み続けたのである。5戸で組合を作り、さらに農事世話係を設けたこの開墾は、永く北海道農業の方式とされたのだった。

